

水稻種子の取り扱いは丁寧に

松本農業改良普及センター

浸種作業は育苗の重要なポイントです。基本事項を守り、育苗に向けた種子の準備は丁寧に行いましょう。

1. 浸種温度は10～13℃、積算温度は100℃（13℃で8日間、10℃で10日間）を目安に十分な浸種を行ってください。

浸種温度を高温にして浸種時間の短縮をねらったり、適水温でも浸種時間が不足すると、発芽遅れや催芽ムラの原因にもなるので丁寧に管理を行いましょう。

2. 浸種初期（浸種初日）を低水温（3～5℃^{（注2）}）にした場合、発芽勢が低下した試験事例があります。

発芽勢の低下は、発芽遅れや催芽ムラの発生原因にもなるので、浸種初期の温度が5℃以下にならないように注意してください。

また 浸種温度が15℃を超えると、ばか苗病の菌が繁殖し易くなります。

浸種温度は10～13℃を目安に行ってください。

3. 浸種の水量は容量比で種子の2倍以上（種子1kgに水4ℓ）のたっぷりの水で浸種し、浸種期間中は1～2日毎に新しい水に換えてください。ただし、薬剤による種子消毒後の浸種では、最初の2～3日間は停滞水で換水はしません。4日目から換水するか水を循環して酸素を供給してください。

4. 浸種中は、種子の上下の入れ替えを行い、積算温度がムラにならないよう注意してください。

5. 昨年は登熟期、日照不足の条件下におかれましたが、松本農業改良普及センターの発芽調査では、松本管内で生産された平成29年産種子で発芽勢が劣る事例はありませんでした。

注1： 発芽勢とは、発芽率測定方法による、5日目の発芽率をいいます。

注2： 3～5℃は手をつけていられない水温です。

水道水の水温は7～8℃位（普及センター2月末調査）ですが、流し始めの最初の水は、外気温の影響を受けて、2～3℃の冷水になっている場合があります。

2～3分流しっぱなしにして、水温が安定してから使用しましょう。